

第九回和辻哲郎文化賞 一般部門 受賞作

長谷川 三千子 著『バベルの謎—ヤハウィストの冒険』

(1996年2月10日 中央公論社 刊)

長谷川 三千子 はせがわ みちこ 昭和21年(1946)生まれ。東京都出身。専攻は、哲学、比較思想、日本文化論。東京大学文学部哲学科卒業。同大学人文科学研究科哲学専攻博士課程満期退学。埼玉大学教養学部教授(受賞時)。現在も、埼玉大学教養学部教授。著作は、主著に『からごころ—日本精神の逆説』、『民主主義とは何なのか』などがある。

受賞のことば

日本精神とは何か、といふ探求を生涯の仕事と思ひさだめて以来、和辻哲郎さんといふ方を、ひそかに「ライバル」と考へてまいりました。なかなか追ひつけさうもないけれど、その背中がちらりと見えるだけで、歩きつづける勇気がわいてくる—さういふ大先輩として和辻さんを眺めてまいりました。いま、このやうな賞をいただくことになりまして、ふとその大先輩がふり返つて「おい、頑張れ」と声をかけて下さつたやうな思ひがいたしてをります。[追記—今もなほ、この大先輩の背中を見つめつつ、もがき進んでゐるところです]

※追記は本誌掲載の為のもの。

《選考委員評》

切れ味のよさ

陳 舜臣

「バベルの塔の物語」は、いったい「塔の物語」なのか、それとも「言語の物語」なのか? そのどちらとして読んでいっても、この物語の記述は、尻切れとんぼになっていたり、矛盾、分裂したりしてしまっている。

それについての答をみつける作業が、長谷川三千子さんのこの大著である。戦後生まれの人にはめずらしく、この作品は「歴史的仮名づかひ」で書かれている。その理由は本書の「ただし書き」で述べられているが、これは本書のテーマともかかわりがあるだろう。

書くこと読むことは、話し聞くのとは違つたかたちでの、「言葉」とのかかわりであると作者は主張する。

さらに一歩進めて、「しるされた言葉」としてのワープロ文章の問題も、作者に検討してほしいと思う。またアルファベット文字と表意文字でしるされた文章の「言葉の移ろい」の速度の差も、派生する問題であろう。長谷川さんのような才能に接すると、つぎからつぎへと問題を提出してみたくなる。

和辻哲郎の名を冠した賞の受賞者に期待されるのは、新しいテーマを掘りおこす才能ではないかと思う。トンネルを掘ろうとしても、なかなかむこうがわの出口が見えないかもしれない。だが、そんなことをおそれずに、掘り進めてほしい。

長谷川さんの提起したテーマは、きわめてチャーミングであり、その方法は硬質のミステリーの絵ときを思わせる。くだいた言い方をすれば、読ませる物語りである。なによりも文章の切れがすばらしい。創世記をこんなカットで示してくれた「作家」は、これまでにいなかったのではないだろうか。

梅原 猛

今回の応募作品の中で、長谷川三千子氏の『バベルの謎—ヤハウィストの冒険』を発見したのは審査員としての私の喜びであつた。

この和辻賞は、前年度発表されたフィクションにあらざる學術書あるいは文芸書に与えられるものであるが、従来、ともすれば堀田善衛氏のような大家の作品が多かつた。その点、長年審査員を務めた私の不満とするところであつたが、今回の長谷川三千子氏の『バベルの

謎』は、そういう私の不満を解消させるのに足る作品であった。

『バベルの謎』は一つの哲学書であると思う。私は、多くの哲学研究書に哲学精神の不在を感じるものであるが、ここにはまさしく熾烈で重厚な哲学精神があるのである。ニーチェは、女性の哲学者などというものは存在しないと書いたが、ここにはニーチェの言葉を反論するに足る思弁があると思う。

この『バベルの謎』は、キリスト教の謎、あるいはユダヤの謎に挑むものである。こういう謎に挑むには対象に対するある種の距離が必要である。著者はキリスト教徒ではないと公言しているが、キリスト教に対する距離をもった愛情を忘れていない。

この著書は最初に大きな謎を提出し、それを解くうちにまた謎が生じ、またそれを解いていくというふうに展開されるが、そこに粘り強い思弁がある。私はヘーゲルの『精神現象学』を読むような気持ちでこの本を読んだ。

もう一つこの本で関心させられるのが、氏が丹念にヘブライ語の原典にあたって思弁していることである。私はヘブライ語ができないので、氏の言うことが正しいかどうかを判定する能力はないが、哲学的精神の特徴の一つは、あくまで原典にあたって考えることであるとすれば、ここにもまた哲学的精神の表れがあるといつてよいであろう。

『バベルの謎』を推す

中野 孝次

司馬遼太郎は私の最も敬愛する小説家の一人である。その司馬さんの後を襲って和辻賞選考委員を引受けるのは、私にとっていささか荷の重いことであったが、熟考の末この光栄なる任務をお受けすることにした。今回はその最初の選考会で、私は少々緊張して事に臨んだが、案ずるより易くすらすらと選が決った。五分もしないうちに決ったのは、選ばれた『バベルの謎』が力倆と強さに於て断然すぐれていたからである。

私は家を出る時から推すならば長谷川三千子『バベルの謎—ヤハウイストの冒険』しかないと思っていた。旧約聖書のモーゼ五書の第一の書、創世記と呼ばれている部分のIIの4からXIの9まで、アダムとその妻の誕生、カインのアベル殺し、ノアの方舟、バベルの塔の建設をふくむ部分に於て、神と人と地との関りを論じる。なぜ神は人間に対してかくもきびしい罰を与えたか。分析と推論は鋭く力強く明晰で、私は自分の知らぬ世界を啓かれるよろこびを味わいつつ、ひきこまれるようにしてこの本を読み了った。これほど力倆のある女性の学者が日本にいたか、と感嘆した。おかげでユダヤ人にとっての神というものがよくわかった。和辻哲郎文化賞の対象としてこれは充分それに値する内容と力があると思った。

断然これ一冊と決心して出席したのだが、陳舜臣、梅原猛委員も同じ考えだったので、あっさりこれに決したのであった。私は著者にとってこの賞が、さらにまたいくつもの新しい仕事にとりかかるための一つのきっかけになればと願っている。この人のものはぜひ読んでみたいし、そう期待させるだけの魅力がこの作にはある。